破例彗星

美妙

本間文庫
文庫 14
A 67

本間文庫

文庫14
A67

破り
石
彼
彗星

破
例

稿

京都帝国大学図書

破例彗星

破例 稿

（二）

下から上への火は燃える。上から下への火は消える。順の逆に為った。のは逆の順に為った。のと同じこと、毎すると矛盾の消滅だ。ハレー彗星の酸素瓦斯が強度に地球の空氣に混入し〻〻結果、窒素プラス酸素の空氣が酸素プラス酸素と為った。下から上へ一燃えるごとに火が上から下へ燃え出し〻様なものだ。地上の生

物は面白らうい。面白いところに、よく情無いやうに狂顛して。

篠目重

狂顛して其中に、[illegible]遊といふ二十八歳の男と[illegible]高りん子といふ二十歳の女とが有つて。遊、これは本々神経質で、極端に氣が小さい。りん子はと云ふと、特てい馬鹿でもあるまいが、度外れに煩動に乗易くて、而して同じく[illegible]れ氣が小さい。氣の小さい点に於ては全く世話に云ふ似て者夫婦だつたが、それでも神経質とか俠とか兩々よく調和して見えて、

定情て誠に睦まじい。

「ネエ、若し、貴郎遊さんや。遊さんてば若し、遊さん、帰つて来て呉れ。何にも言ハないで、貴郎うなすつて。」

りん子は傷へぴいてりと寄る。鈴言りん子と、聲はか何るも鈴をつくりてよく附いて名で、響く。勿論折々盛んに振で、昔に奇麗によく立てる。其時と奇麗を[illegible]遊して、鐵棒式れが[illegible]ちゃらと鳴る。

「ネエ、何にも言てないで、貴郎そうす

つたの。言てなしでみんて妻の云ふのが失敬だって怒ってら？ ちゃなくって？ もし透さん。透さんてへのが酷？ 是は意味有りよ。今に十さい可愛いのが出来よって。その時や早速貴郎父さんよ。その時の父さんと丁度いいから今から稽古する氣での透さい。そうら、そはのさんよ。分かって？ アラ酷ぢ〳〵為すって？ まだ何にも仰やらないわ。なぜ貴様なくってしら投首なさるの？ そわてなくっても貴郎首は長いのよ。投首の具

恰好御覧なさいな、家迄縊殺した鶴鳥そっくりだわ。御覧なさいな、まるで鶴鳥。」

「見ろ〳〵と言って、自分で自分の首が見えるかい。」

「ちゃ、鏡で。」

「映ってる間は投首にならぬ。見る氣になって首を上げれば最う不投首。」

「アラ否だ。手吉ぢゃ。それぢゃ不投首なさいますな。」

「その不投首が出来ないんだ。もっても云

はけりや分からない。今日しっかり診察して貰って。やっぱり己のと腦病だそこ。腦病も腦病、まづ不治だも」。

「不治とは？」

「病根が絡まり合れて、藤蔓同様もう断ち切れ切りやうも無いのださうだ。昂じる一方で精神が糊ンして、物の菖蒲も分らず、躑躅も霧島も分らぬ始末で、自分で腹を霧島ぶらぬ始末で、何一つ無くなって、果ては。」

「マア苦だ。なるほど、それで不治ですって。藤づから矢張拔首のぶら〳〵首。」

「己は死を決しているよ。それ故遺言の詩を認めます。此前にくる己は最愛の良人だら。夫婦間にまた子も無いだろ。己は一思に自殺する。此前は年も若らし、美人だし、生殘って快楽をせを送れ。」

「即う、マ、それが遺言？　てきぱきし過ぎた遺言ね。年が若くって美人だって、貴郎に別れて何して樂が有りませう。」

「美人の上に淫奔な前だ。生殘れ。」

「美人で深切な猫のこと、生殘れやしま
せんわ。死ぬも一緒に」
「其上にまだ前は廿一人前以上の事が出
來る。生殘れ。」
「廿一人前以上なら猫のこと、一度かうして
下さる貴郎に別かれるのは否よ。死ぬまでも
一緒に。」
「本当ですの。」
「本当よ。」
何を知らんや、此間答中いつかこの人共瓦斯
と。消える。いま是からが珍事となる。

（三）

廿四五の方が感じが鋭いと見えて、
瓦斯の明目は遂早くりん子の方に現れた。
身を震はして、「アラ嬉しい。死ぬまで嬉
しくてよ、貴郎。生先が長くて年が若く
って美人で深切で、そして廿一人前以上の事
が出來る妻のこの妾を、貴郎の身ン為つたら
てりゃ最う御自分の後に殘して行くはお部
でどうすること。でもまあ、妾だって死ぬわ。
否と言ひやしない。貴郎。何だか[illegible]う思ふ

と、まるで耐らなかりほど美い心持よ。そうして[illegible]ンでさう、何かが知らずに美い心持よ。
涙や總身が震へてゐた。
目を細くしてちらと見て、遠く頗る延びる
「嗚呼さりとては情が濃いぞ。是こそ真の夫婦だぞ。死に迫って快とある、これ實に極端だ。極端が共に一致する。こんな愉快が又と有らうか。さりたら奇妙だな。」
「奇妙って、何が貴郎。」
「だってさ、現在今些し前までは己は蓄有に

不治の脳病だと宣告されて、忘々しくて耐らぬ程の心持だったろ。」
「だってさ、そりゃ貴郎、貴郎だけが考へて事なのよ。」
「イヤ、是は勿論嬉しがるだがな、それにしろ夫程の不愉快が急に何かの只愉快に為って奇妙さう思はれない。」
「貴郎、奇妙ちゃないってよ」と、りん子澄まして「若要を偽りてそこの夫婦ですもの、美い心持の一致するのは当り

前ですわ。何だか、それでは美しい心持なのよ。」

「己も何だか美しい心持なんだ。分かったと、僕の手を。」

「分かって、貴郎て、手が何らこの為まった分かる。」

「されば、手も奇妙ぶる。打った具、この心持の美さと云ったら無い。いてナ、もう一つ。妙な、妙な、そんなに美くて、貴郎と」

「併し是だけア何様か知ら」と今度は具手を具体にりん子の肩を打って見る。

「アラ、好いこと。奇妙わえ。」

「奇妙とは愉快らのい。」

「ちっも具美いん持とうらうで、もてを十ってて頂戴よ。もっと。」

「是でもの」とおかしく。あて爾うしく。」

「マア美らこと。はあ。何なら最下らし力ア入れて」

「其位の」と下しく。

「マア、美いこと。まるで絵の様」。
「奉国で断るこの」。
「マア、美いこと。まるで絵の様」。
「驚いて困つたネ」と感心させられて居る。「いゝ見と奇妙だつて。も前の方は痛いところの美いに将いろうと言ふ。打つ色の方はまこと妙だ。」
「痛くあるくてネ」
「それどころか、辛抱だ。」
「アヤ打つても同じ様に快いと
は妙ネ。こりゃ豊郎史(あなたの)もあつまんネ」。
「すると、幾何(いくら)だ。」
「まつたくなくてもよ。言はり前ちがはない
て事なのよ」
「ふゝ。言はり前言はないそうを、そんなら外れあるなのか。」
「そうも、不思議だゝゝ。死なうを云ふ
ロから海落まで。まるで流れるこうのネ。」
「四時過ても利そのれなのつてからだと」。
「マア酷い。まこうなら、そんなに海落。

ちや私にて見せてよ。さうそは西落
とは見上げた豊助」。
「ぬいどらいて！」と、驚いた。一日から
十まで苦世に。いよ〳〵明日は何うかしてる。
ハーア、分かつた」
「何かです。」
「西落まで。」
決して身が苦痛さうに、出て、死なうと
なると言ふ、是は自分と共終迄の所まで押詰
めるの陰だ。いや、極端の結は極端の楽に
戻るの理だ」そいさうとて悟ぶ。

（三）

逃げ行けて、「全くだよ。押し詰まれば元
へ返る理だ。
「一つ飛ばれは大津へ戻るだ。」
「晩飯ぬれば大鼠躍の。全くネ。」
「ソレ、その通り、昔からく昔西落だ。
して見ると何うても、此所は吾々夫婦の者が
死ぬまで越すこと。ここは無い。何そ、うれしいな
ものしか。」
「然当よネ。」
生きて此年まで生きる事い
まで死んで見ることは有

りまやんの方エ。私も此方は死んで見たくつてよ、あなたの」

「勿論お前は熟睡の時や、随分全く死人で居たの」

「まあ言や豊郎のつてもよ。一文無しの為つた時まんで、毎でも〳〵、死人の氣に為つて偏り〳〵そ、に続けに仰つてよ。」

「古瓦はモウ可いよ。なぜ、り人子、お前ところにならうが、えなに何をみて好いへ特で〳〵耐へられなくなつて見るそ、ぞうの

どんな無理でもして、不快な心持を為たいがナア」。

「全くよ。私やそうか思ふさま借金を催促されて見たくつてよ。」

「結構だ。それはそれから高長から続けざまに叱られて見たいかナ。」

「それでも私や氣障な奴に煩つて誠められて見たくつてよ。」

「すると邸は陽樽の後押をして見たい。」

「そんなら私は遮蔽を看て、質屋通りを

て見ろい。」
「〳〵、そんなら己は狙られなに思ふそ
吗錢を貰ひろい。」
「そんなら私ヤ頭婦の頭を誘かんと殴
って貰ひろい。」
「そんなことは汽車の扉に指をキュッと挟
まれろい。」
「そんなら私ヤ電車の中でを往生のして見
ろい。」
「自分の折角苦心して態いた試驗に落第も
して見ろい。」
「自分の野金庫帳から金を他人に奪ん
ろい。」
「年が年中昇級しすれ、配当も賞与も無い
ばかりして貰ひろい。」
「お友達が良家に縁付て、栄達で接遇って
鼻の先でエヘンと咽はれて見ろい。」
「自分の妻を盗まれて、そして立女の家に
良人が婿を沢山置いて、そして立女の家に
ばっ入浸に為って貰ひろい。」

「アレはお早世だ。ぶが幾ら辺う日でも
う言ってた所が、誰もウンと云って不愉快
に為て呉れないでも此様な詰まらない事を無
いよなア」。
「だから死ぬに限るわネ」
「如何しても死ぬに限るんだ。」 するとリン
子や、前も決して死んでも思い残る
わな。」
「思い残すぞ。思い残す位なら
こんなに死いてめつくも為まいわ。貴郎も私
も二十代、若盛りを一期として、快く自殺する
と云う、こんな面白い事は有るやしまと
んわネエ。 由賢なるいま、大抵な人が年を取
って五十六十に為らなければ死ねないでもあ
りませんか。」
「なぞ言うな、実に急りだ。 五十六十、乃
至七十の八十の為って、そうして死ぬると
いう因業な奴等の多い世の中に、吾々夫婦は
まだ、二十代で死ぬるとは、こんな
好運は有りゃ為ない。 況っても可い位だ。」

「それから新しい丈で結構ネ」
「酒肴でも何しかめた。酒はモルヒネ入の可
しかの知らし。」
「亜砒酸を入れても可くってネ」
「亜砒酸は薬味の代用にして、粉のまま料
理の上に振掛けるのだな。」
「制身は」
「河豚を限る。極盛は蛇苺をアレラされ入
れるんだな。」
「さうして蘭物は菊の花に極の葉です
か知らし」と気乗る乗り地一二か。

（四）

彼天蔵は死の相談、遣は鎖けの如き顔。
「しうし、りんこ子や、料理も可いが面倒で
なの。それより思様に面倒でないのが同じ事な
ら好ましい。ハテ何かな」と首を捻って、甚
首から急に思付いて、
「首をでも縊るのナ。」
りんこも思はず驚声となる。
「首縊、いと事ネ。」
「足が地を離れて、身が宙に浮た様子は俗

世界の型ではないけど」
「全くだわ。俗世界の型でないとすると、
私達は何でせう。面を落てる女だから、そう
してもし天女だわ。」
「天女々々、面白い。そこで天女が涙と溜
らす。」
「瓔珞とは言ふ飾玉よ。」
「瓔珞か。妙々々。そこでロからは古き出
しなくる。」
「赤い手の飾房よ。好いでしょ。ところ
で又豊郎となると、面を落てる男で、美男子
の色白で、餓鬼面が残てる深の
無い人柄で、そして痩せてるから、まる乾
びたキュウリよ。」
「キュウリは嬉しいな。そんなら首縊り
を決すべし。」
「待ちなさいよ、行れども。投身も、
豊郎、よくてよ。」
「すてた。死に方ら拾を洗ふ、是も軽便
だ。(投身そうならと決する)」

「お待ちなさいよ、ぶけれども。輝光も
くらべよう。」
「それもさうだな。肉にあつて、ちぢかく
な写真へ納まつちまふ、是も気が利いてる。
それぢや線路枕を決すつもりか。」
「お待ちなさいよ、ぶけれども。浅間の華
厳もよくべよう。」
「なる程。」
山の大烟突掃除をか、滝
の壺測量をかの事術名義で、是も大に振つて
る。そもそも大きく出掛けて、富士の那智と

決すつもりか。」
「お待ちなさいよ、ぶけれども。」
「オヤ、まだ有るのか。」
「有りますとも。凌雲閣飛下り、豊郎、大
変よくべよう。」
「さうだ。」
鳥の如くスツト下へか。さうと決すつもりか。」
「お待ちなさいよ、ぶけれども。モルヒネ
もよくべよう。」
「ムヤ〳〵。」
妙々々。事実へでも文ぶて、ムヤリ〳〵

か。そんなら、それと決するか」
「お待ちなさい、ぐれさも。」
「アッレ、まだかい。」
「まだ有ってよ。極いくのよ。刃物で喉、
でもブツりとやるの。」
「なアるほど。血が出るの。」
「血は、貴郎、赤くってよ。奇麗でよ。美
郎でよ。」
「うム美郎だ。韓紅さ、云ふからナ。」
「配合が可いのよ、貴郎。なぜってナ、考
へても所見なさいナ。死顔は蒼さめるでよ。
血は赤いでよ。毛は黒いでしよ。歯は白い
でしよ。其上に貴郎なぞ黄が有るから尚可い
のよ。黄ですか。貴郎の歯っ屬よ。」
「白い。」
刃物に限る。美的死方だ。
五色的死方だ。」
「五色的死方はよくってえ。刃物でブツり
とやると、赤くなって、刃物でブツり
白黒で息が絶えてよ。」
「それが可い。但し、刃物でさすると、新

工夫に行きついた。るけ苦しみの長いやん、まづ牛から殺いちまふ。それから豆を切っちまふ。それから首を切っちまふ。」
「牛から殺いで、後そっちへ回すわと。それから豆から先へ」
「それちゃ牛が使へなくなるよ。」
「ごめんいんねん。そんなら咽喉をでもやる。」
「あゝ、それが一番よさそうだ。」

（五）

当前ならば一身の一大事たる自殺のやうな事の相談が何そしてこんなにテキパキ捗取らうか。これを其所がソレ其彗星の尾部の陰だ。苦面も無ければ苦悩も無く、夫婦心中をいふ事に為つて。さア、其死ぬ為めの道具を出す、それさく嬉しくいそ〳〵する。
「すると、りゝ子や、其刃物の選擇だ。まづ何れしようかのうぞ。」
「短刀に鏡でもはいって、鏡台。」

「短刀が可いわな、やっぱり。」
「何んざんすのも、あなたは短刀から。けれど塵(ごみ)を作りやすまい。」
「短刀に塵の有るとは何だい。」
「だって鞘(あれ)洗濯だって。」
「これは、其洗濯ぢゃないのさ。選ぶんだ。浮れて慌過ぎちゃいけないぞ。」
「アラ厭だ。分かってよ。小や短刀持って来ませうか。」
「早くその何らは。」

「善には急げって来。」
りん子は浮くやうな身の動作(こなし)で、二三遍(べん)を くらくらと回りして、箪笥の抽斗を開(ひら)けると、その引手の常ならず、スウツと抜れる音のする所を、今日は又何うした加減か、抽斗迄が浮かれて居るその、スらくらの音ではなくて、ガイと妙に響いて来る。
「マア、否な箪笥だね。」箪笥の何かの氣になってるわ。エヽト、此抽斗の帳面と巻紙とを、引出ら賞って開けて中味を今やて了うた後(あと)へ残(のこ)した

りの宣托とて、

「中味と言ふ言ふるまでもない。いろ〳〵言
ふて〳〵居ても、大して衣服とるのもおぐけは
呼出されて来りのから、あの小妙だ」。

「ほう、なるほど、見つともない。夫でも
何でも警官の中にゴタ〳〵ケを入つてるんで、
今短刀を捜すんですわ。有りますか」

「有るのい。うム、なるほど。」

受取て驚面として、「やり〳〵」愉快な無
る福の鍵だ。如何なものさすりん子、こんな

短刀なんぞを祥な物だと思つたけれど、親
からの譲りと云ふので箪笥の中に仕舞つて置
いたのが、端無くも今日我々夫婦の為に福
の鍵と為るなんて、不思議なるかな。まる目出
たい」と、スッと抜く。

「抜けて、豈下」と居直りて、「アラ、マ、
もめ〳〵な短刀よ。此鏡の出来損ひ、あたし
の顔の映つた様子と云つたら、マアのオッよ
ッホ、ロッハッハ。」

芝に魂して、「ウム如だ。なる程、己の

顔をした。　イヤ清楷は面に映る。」
「顎下の鼻の下が長くてこそ。」
「地前の鼻の孔は一対もある。」
「化して出覗るなんか、豊下の眉。」
キニ押縮められて、何のことは無い、まるで慢氣の附いた芋蟲よ。」
「さうゑ云へばこの前の日を。」
それは塩梅式で、上が尖って下が膨れて、手も無く擬玉珠の出来損ひだ。」
「本当に変な短刀ね。」
「否なもこころの虚脱
切って短刀ネ。」
「さう云ふ、是で死ねるもの知らし。」
「サア」と困る笑顔をする。
「駄目ッ、是ちや何うも。困るネ何うも駄目ッ何も駄目ッ面白くはつり見えるさ。」
脳病でせかつ好にうなのが嗚呼いつ塩梅化と思ふ所のりて、そんなら出来る丈の不愉快を味はらいもんなし、短刀を見ると此仕儀化。短刀の奴のも清楷化。りん子、是は諦めよう。」

「死ぬると、あなたの。」
「さうだとも。死方を選ぐべう。そう
くってる度々々くい――そうして――死ねる
ものの。そこで、短刀は廃止として、そんな
ら別に何にしよう。」
「投身は、あなたの。」
「世俗無しこのナ。さうだ、投身と決めよう
ぜ。」
「百本杭か、吾妻橋か。」
「大飯食か、杉箸かと。」
「アハハハ、それも好いわ知ら。」

（六）

遂とうとう子は遂に入水と決定して、其辺双々手を携へて、後は野となれ山の手線の電車に乗って、無茶苦茶に降りて降りて降りて降りて降りつれまはる。

降りつれまはるものの、決して無意味でなく。何ぞ車中の乗客ぞの見やる狂態に為て居る。一人として裏面目の者は無い。五十以上の婆ばわが花見に若返りでもしまこと二合らで、あの緑深の手拭と頭に巻い

て、鉦手が舞ってくるかと思ふと、繃帯で
頭を巻いた怪我人らしいのが、切戸口から
いきなり飛び込んで来たのも
人と餃合うまでの間、その繃帯の間から指と指
入れて、底口からべったりした血の塊りを抉り
出して、古鼓で拭めて居る。さうかと思ふと、
自分の妻と坊が泣くのらと云って、太神宮の
地見いやうに、上へ抛げ上げて、手で受け
て、ケラケラ笑ひしてゐる神さんまでも居
る。死を決して、あのしかめしい夫婦も

這這車中の光景を見てゐる笑死なんばかり
耐へ〳〵ないやうな。耐切れず、そこでさう
〳〵ゆきの小橋で降れようとった。
「オット、此所が好いらしい。」と、そ
面通りを見て止めた。
「此所でドブンとやるのですね。」
「手間が掛らずに、まるで信玄の
ように手間が。」
「欄干から向まで飛び五六丈有るから
う。
下に落ち切る迄に、身體も時間費やす

だらう。十二階を除いてとすると、東京中に
恐らく落ちられん時間の掛かる段
をもつて、此所以上の所はもう有るまいよ」
「さうですね。落ちるに手間の掛かる段と
なつて此外に手間の掛かるやうなのは、他に
有りやしますまいねエ。」
「有るもんか。」
「鬢洗粉で棒髪洗ふのは？」
「ハヽア、落ちるに手間の掛かるつて洒落
かい。」

「まだ有つてよ。」
「こりや不思議だ。そりや何だい。」
「執念深い狐憑よ。」
「オヤ／＼。妙々。何だか今日は愉
快な日だ。お前の口からこんな奇抜な事を。いつも
拙い口だらけが、こりや私の前に好い聞事
だ。そんなら己も一つ負けまい。」
「あれも有つてよ。」
「サア待てよ。負けるな死人でも寂切れな
い。エヽト、落ちるに手間の掛かるもの、

有る〳〵。

「有て、」豊郎。「本当、有て？」

「夏の夕日とは何うだ。」

「アラ好いわ、詩的だわ。そんなもあるわね。」

「つ。」

「驚いた。また供給が続くかい？」

「今度は史劇的なのよ。」「可くて？」

「大変だ。史劇的だ、史劇的で、そうこうなのよ。」

「可くて？　史劇的ですよ。本工、落ち

た手向の掛かるもの

女。」

「コリャ、成程。ツイ忘れた。苦しいな。」

「苦笑、そうも逃げんわ。」

「そんならとれそうだ。」

「又出来て？　あゝ惜しい。ざまのの

豊郎今度のは。」

「今度のは。今度のは戦記的。」

「病気的、アラ変だ。ちゃア筋張てゐる

ていでしょ。」

一の谷落城後の哀弱

「さうである。遂に解ける。しかし、戰記録なんだ。落ちる手向の掛かるもの、露軍の死守した旅順城。」

「慣らい。ちゃ私もそうだ。」

「畜生め、又もかい。」

「落ちる手向の掛かるもの、数代続いて同じ家。」

「そんなものも最一つ。落ちる手向の掛かるもの、是程有のない札せ。」

死わるもない景気なの、何事も駄るから苦言は無い。

(七)

佐藤夫婦両人も駄る気地に為て海落逝し始めるもの、もう飛迫るもの気は折れた。実も自殺する事は利邦の狂的所作に過ぎず。其利邦の機を失するもの、[illegible]迫も自殺出来ず。海落逝で既に機を失して、今更其海落が稚切いるもの共に、二人共けろりとして。

「[illegible]、飛迫るもの何うせ[illegible]、りんの子、飛迫るもの何うせ。何れの己は要れる為った。」

「飛迫るもの要れる為れんでしょう。何ぞか

知りませんが私まる」
「ハ前まか。ハア成程」。
「オヤ、、廣瓜らしいこと。ですけぞも金
くなのよ、今の今迄飛ばしまうと「高に思ひん
でもいろいろ、此欄干から下を見ることー」
「下を見ると、うン大丈夫だろう」。
「欄干は上ではなく下よ。上から私達が飛下
りると、何れ下のほうへ行く」。
「まっさかさまだぞ。」
「「場所が此通り長いんですもの、落ちれば

無論目が眩る。同じ死ぬでも、目が眩てこれ
のは不快だ。瞑ってこそ何うでもよか。」
「瞑ってて眩らァナ。眩ることは度量勢で
目は彈を向けられる。向けられると猶眩る。
眩出しさら猶眩る。目の中にきて大花が見
える。大花が大の車で回る。そしてもっと回り
「「ぐるぐるぐる。」
「「快ネ、そんなに回ってもアノ。えてて大
の車ってこと。」
「今迄通行来ってはうけな。」

「でもね。もうこうなっては、好きなわ。廃しよ
さうよ、此所で死ぬのは、豊郎」
「そんなら廃止を為さうのね。さうしてもね
他にて何で死ぬ。短刀もいけるんだと、夫
より身投も面白かしと、さうだ、首縊が可い
か知らの」
「さうだ、天女はこうだ。」
「全くだ。さうを為やう。そんなら天女や
上野へ行こう。」
「きっとつまらん、逃げさう。いつ
その事、羽でも有ったら可かったわ。」
「羽が無くてもね、溺れさよ。此上羽が有ったら
ほ、それこそ手も附け得られまい。只何の
無くなられ、もう電車も絶えて通行する人
に、夫婦だと見せやうと上野の森へと走いた。
途中いろのの高鳥居が同じく赤狂舞して、
カア、キャッ、喋いて居る。
「賊やあの森だわ。」と、逃も黒気に取ら
れてる。「鳥までが見えるのの知ら。」
つまらぬ無い冒険。夜で目

「見えないにて嘆く角ばり戸又有りまセんわ、言語摩の取組合。」

「そうして不思議に回るはに。面白い気除で。それでも此辺の暗い所で、ブランコをさるとすこの。」

「結構ネ。貴方知らせる。私ヤ好し無ヤ絵めて来てよ。也れ。時出れ、絵珍の帯なら汚えよ。」

「前をつ、繻珍の豊郎の豊郎」

「思ってて。」

「ここも餘りな冗談だ。多の頭ちゃあるないし。繻珍の帯で鍋を縛って見ろ。頭どころか、頭冠りに為って仕舞ふ。」

「だって帯幅一杯ある。」

「一杯？　オヤ呆れた。何言ってるんだ、ないりん子。人形の帯の事も言ってるのか。」

「嘘よ。私が繻ってるの。御覧なさいな、見ですわ。」

と、逃の手を執って、手探りに捜らるるを

何かと思へば、何様繻珍の帯は帯にせよ、馬鹿馬鹿しい、下締の細帯だ。

「此奴の搾いれと。」

あゝ、繻珍の帯は帯だ。

「ふけれども細帯とは……」

「アヽ面白い、アヽ嬉しい。」

そう〳〵豊即搾いれる。臨終の間際にみて、何ぞ好い心持が続くか知ら。オヽ、アハヽヽ、アヽ苦しい。」

当前なら腹がえつの知れぬ、例のことを言て遊の身になっても、中々怒る沙汰ではない。

併し繻珍の細帯を首を縊るとは面白くも居る。首縊に極つた相場は大抵が三尺帯の始末様、さもなければ麻縄で、上等に行つてもそこらで、縮緬の共巻帯位にしか過ぎぬのと、繻珍などは奇抜だ。

「振てる細帯だ。」

振古未曾有の縊死だ。伊達正宗だのは金箔置いた、碎花に掛りがいと言つたとか言ふ事だけれども、繻珍や緞子の帯で首を縊らうとは思ふまい。可しそんなら

る枝が好いか知ら。暗くてよく見えない
けれど、りんごや、、、し彼の枝が問題だ。
低くって水平で――」
「嘘、ありゃ枝堀の上の枝だわ。」
「ふン恐らく失敗して。ちゃ彼だ。あ
ゃ松だ。」
「やっぱ恐るべきいましょ。」
「駄洒落だ。」
言ひながら捜して見ると果して[illegible]松の枝
だ。
けれども何うも細過ぎる。

「駄目だよ、是は細過ぎる。」
「しっかりした細過ぎちゃ。」
「細すぎて折れちゃアな。折れられて了ふ
様は無い。」
「だって」と豊郎は麒麟見たいなもので、私は蟷螂
見た様で、二人共痩せ堀なんだよ。幾ら固方
が掛かるもんで。試して見ないとな。」
「試す。」
「帯を何うかして引掛けてよ豊
郎、それから二人が一緒に摘んで、下に吊下

かゝて見ようわ。折れるもんなら直折れますよ。」

「なる程夫も一説だな。折れるもんなら死ぬない枝だ。折れないもんなら死ぬて妙だ、普通とは思へども反対だ。枝に縋って何うかすると言ふ場合普通のであって見ろ、折れるもんなら死ぬ枝で、折れないもんなら死なない枝だ。」

「だって死にたくって耐らないほど、面白くもとは反対の私達ならなくって、豊郎？、せの中の物事が何でも皆アべそこべなのよ。それだから折れないか知れないわ。下がって見ませうか、二人で一緒に。」

「ふ、然だ。それも面白い。可いわ、そんなら断ち紐に小石を縛附けて、ぼうんと投げて引掛ける。」

「マア知慧が有ることゝね。」

「いゝ、可しかね。ぼうんの掛りますわ。アラ恐ろしい。」

石燈籠の頭へ

巻附けてよ。」

「忍びこのナ。全體ゆれ得手なんだが。分
つて、帶が攫れるいんよ。それから石もすで
無教育だ。」
石燈籠に縋着いて、やっと の事で巻きなご
して、再び四の所へ戻って、大例のまるぼ
うんとやる。帶の手繰が短過ぎて、石は枝に
絡まるまるる。是幸因的その反對に、却て
逆の方へ向き戻って、何ずま、逆の弱へ向ウ
ん！
「ア痛、タタタ。石の奴めが、ア痛タタ。」

「そうして？」弱へ折れかかって？」
「折附かって、サア面妙だ。今一寸痛かっ
た。」
「けれど直ぐ美い。」「持だ。」
「折附かって痛かったのが、もう直ったが、
持ってすって？」
「そうもムダ。」「擦ってる。」
「駄目ネエ、貴郎、死ぬないわ。石は石で
絡まるる為ず、折附めれば却て美い。持にな
る、私の枝だって見ると細し、折角折って
絡めて、やっその思で二人でう掛らうとした

て、折れて仕舞ふか知れないわ。」
「本当にな。困るなな。美い心持続きも困るなア。そうして死ねりゃあ知らん」。
連続に汽笛が聞ける。なるほど汽車で進行する。旨いぞ、是ぞ国境ふまい。
「りゃ子、汽車が寧そ可い」。
「轢死？　豆腐や、全くネ。」
「早く気が附きゃ可いのに……それでも豆腐ハン、駄附けやう」。
「アラ嬉しい」と躍ねつ。

九

茎の水でドブンと行らうとしゝ者の流れて仕舞ひ、短刀でツツリと行らうとしたのが鈍くて仕舞ひ、私の枝でツツリと行らうとしたのが苺ひて仕舞ひて、百万死ぬのに只苦しく、天の助の汽笛の声。線路くゝニ人は只急いだ。

「味吸ぬ切れてよ、遊さんや。今度こそも一回遠無く死ねるわ。却て静に歩いて頂戴よ。直々許てもして行きませうよ。」と、其声は呼

吸の切れる故でもあらうが、上調子に泳ぐ居る。

「それも可からう詰し方らも。やっぱり汽車が一等だよ。」

「轢かれる。すぐ一思でやうね。」

「向這は無く死ぬるのを、欲と言ふと貴は幾らか曲が有って苦ろしいんだ。から」

と笑る、線路に寝てる、ヒレ〳〵と訳無く轢いて仕舞ふ、と、是は興が薄いんだ。」

「全くネ。人間が ネエ貴郎 一生れ二度死ぬるもんぢゃなし、同じ死ぬるなら、何でも、幾らか趣味の有るやうにネ。」

「趣味か。趣味は好かつたぞ。」

「半殺ばかりで好くつてネ。」

「半殺か、結構だ。顧ぶるに兩脚でもふつつり切られて、胴は完全で、ハ、ア脚が切れた心持はどんなの知ら、隨分痛くつて苦しくつて、面白い趣味の有るものんだ位に、味はつて居られる。それ、そつか轢かれていも人間がな。」

「脚が線路へ掛けて置いたら、何うでも
跳飛ばされますわ知ら。」
「可かろう。正面の仕立に機関車に
打付かるまんで何うせらら。」
「それこそ跳飛ばされますわ。」
「脳天が前へ突出してたら、脳がうまく
砕けるだろう。勿論ですとも其時の汽車の速力
「由って違ふらしい。」 如何
「脚の骨が可くってさ。」
「さうらしい。さうと為う。」

全く死ぬのも骨が折れる。迂り快中に包囲
されて、保らて可快を拉めるも是亦骨の折れ
る難題だ。利春も充春も死を嫌ふ時ばかり、
吁、貴れ怖ろしい。いつも死其物を宝と見又
は飽と見て、急に渇仰するとなると、其怖ら
しかつた利春や充春は毎日遊稽な手段
物に過きぬ。
新坂下から線路へ出る。いつも怖いくらみ
氣のする線路が暗中にもホンノリ光て居る
のが心頼々の物そう思つた

「冷たいのネ」と手で触ってり人子は線路を軽く撫でた。

「拭いて置くわな。」

「エ、、迚もの事に奇麗にして置きまやう。」

手帛を出して按ぜと拭く。

頬擦りして「滑らかい。塵一つ無く拭って

よ、貴郎。」「アア、たけわるも面白いわ。」

「今迄線路の上に動う煙りを押附けて、好い思を為たことし無くってよ。」「アラ、誰か響

くわ。」「来たんでやう、ネエ汽車が。」

「なるる程。来りゝた。」「たのし。今度は大

大丈夫。」「たれでも音が何うしてか些弱い

やうぢゃな。」

「本当ネ。」「乞るんでもなしいお知ら。」

「見る日暮里の方からして如何さま汽車は

動いて来る。」「それは動いて来ると云ふもの

旦遅鈍さ[illegible]為らう。」

「いやな、景氣の無い汽車ネ。」

「駄目だな、あれら遅鈍過ぎて。」

「轢くだけは出来まい。」
「だけれども汽車は来ないね。」ママ近寄る迄待って居やう。近寄って来て上のこそこそ。「可いか」
「子や、己が足を線路に出す。」
「分かってよ。」ママ嬉しい」
「それで銭も遅の鈍くても、間断無く進んで来た。あって汽車は漸く近づいて。それと線路一足と出す。汽車はいよいよ近づいて。足を出したのと遅れ線路を塗まして横ぐと動いて行く。

（七）

「アー、ウー、まア、氣の利かない汽車だこと。彼方の線路行つちゃつちゃ」とりん子の声は涙を打つ。
迅もぐつと向かぬけて。
「そんな汽車の奴だ。」勿論線路が違って
か。何でも足は仕方が無い。併し機関車だけで、客車が繋がって居ない。試運轉とでもいふ奴かな」
と云って見送って居る内に、足はまた何う

して事か、機関車が此方へ来る。来るが具来方が如何極りない。ピッピッキピイ〜と変な調子を取って、頻に汽笛を吹鳴らしながら、そろり〜と前の如く鐵道の横の線路へ来るかと思ふと、廣くも無い其車内で、そのピッピッキピイ〜と合はせて、見は為ろう、機関旗を大夫二人が面白ろう振って居る。

汽車の弱は始めてだ。誰でも吹出されも居られぬ。馬鹿々々しいと通越して、何とも評の為様も無くても笑ひたくて為らぬ迄やり〜子が何ろして黙って居られやう。遂に堪らず笑出した。

「オヤ、ハ、ハ、ハ」と車の方は車の方で、機関方が顔出して、透夫婦を透し眺めて、「どうです、あなた方も乗りませんか。大分面白ろうですよ。此所もそこも面白くて、今浮れもしてるんです。」と手を叩いた。

「さて〜是も豪想外だ」と透は機関に近寄って、「乗れとは何ろいる訳なんです。実

は僅か夫婦の者ばかり愉快過ぎるので、死なうと工夫してるんです。」

「いよ〳〵詰まる豊下方だ。」

実は吾々も同様で。

先程も宅の奴等と小杯といふ所へ、湯杯と一つ捨り、線路へ落れ出たんです。只ぢや面白くないと言ふので、此機会事を捨てゝ回して、一つ此線路を思ふ様、全速力で駆出して、宇都宮辺で脱線するか、仙台辺で顛覆するか、白川で夜船のやうに沈没するか、即山で冷えて仕舞ふか、それでも仲須野で鴨焼のやうに焦けて仕舞ふか、又は青森で血の気が絶えて仕舞ふか、物は試しと遣って見る気なんです。死ぬうと工夫してると云ふ、豊下方も同志者だ。御遠慮無くお来なさい。」

奇抜ふ話、好運命。連は嬉〳〵でした。

「やれ〳〵、渡り舟とは此事です。さぞかし地獄へ行きたがる〳〵と、夫婦して考へて居ます。所、待てば自殺の日和です。りん子、何を仕合はな。」

「全くネ、うれしいことッ」
「ハ、ハ、奥さんも流石に偉い。そうと見えるから地獄です。汽車ですッて丁度まだ此車も火の車ですッなんて物で」
「火の車にて見送もし、通の口も落れ込で。」「大分来慣れて居ますッて。」
「質屋の奪衣婆ッも、ネエ豊下、身の皮を剥がれますッてネ、川へ流されますッの。」
「ッ口奥さんも面白い。サア、そうッ同行して人で、見から一遊ッて。」
ソレ、思切って

走らせるまで。」
機関方ハンドルに獅咬附くかの、思ふさまの蒸気を出す。車輪は狂気の如く動く。
日暮里を出る。オツおりすッと行く。
タバタ〳〵と音騒がしく、赤羽が生えたかの如き速力の、音も早さも見可笑しく、一同は皆歓ッぶりで、連和も表も無い痛快。
そこで珍事発加はる。こうして内、空気中の酸素量が急劇に減出して。さしもの汽車の速力がオヤ些しそうかしらかと思ふう

ち、酸素過量の結果として、鐵が燃出す仕儀となる。機関車の鐵板が紙の如くに燃始める。其燃始めの仕方の姿で機関車は全くの大の車で走りて行く。

その内線路も燃出して。泥も燃える。土も燃える。空氣が燃える。烟が燃える。石も燃える。

破例彗星遂に地球と見て曰く、「文明の野蛮と焼尽くせよ！」

著者住所姓名

東京市本郷区西片町二番地

利用邸内

井上茂登